

# らい 来ぶらり 19

## “読書の秋” 特集

### 本への思い—私の読書

#### 『神曲』—地獄の門に寄せて—

文学部教授 裾分 一弘

中学高学年のころ、鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』を読んだのが機縁で、山川丙三郎訳による、難渋な『神曲』と相対するはめになった。が、いかんせん、この高邁な叙事詩を理解するには、私の素養はいささか不足した。

のち、漱石『倫敦塔』や阿部次郎『地獄の征服』を介して、再度『神曲』に挑戦し、以来不相応な版本が気になる程のマニアになった。

イタリア・ルネサンスの美術史を専攻することになったとき、語学学習のためにと、原文の行を追い語をたどって、とにかく日本語に置きかえてみた。古いノートに見いだした地獄の門の銘文は

我を過ぎて痛痕の都へ／我を過ぎて永劫の  
啓へ／我を過ぎて亡滅の群へ／……／—

切の希望を棄てよ、汝等この門を過ぎる者。

幼い試訳に、中山昌樹の語調がのこるのは、当時この大先達の口語とも文語ともつかぬ独特のリズムに、すっかり魅了されていたせいであろう。

地獄の門は、イタリア・ルネサンスの美術の中に、しばしば登場した。マサッチョやフラ・アンジェリコなど。また近くはロダンの大作等。

学生のころ、地獄の門に特別な興味を寄せたのは、別の理由からである。私もまた、一つの門を潜るか否かに迷う年令であった。その門は、「亡滅の群」に通じるなどと大仰に考える必要はないの

だが、私にとってやはりある種の選択と決断を要す門であった。

還暦を過ぎたいま、門は遠くかすみ風化し、『神曲』の門と重なって見える。

まずは、ダンテと私との古い因縁話である。

#### 読書の意義

法学部教授 樋口 範雄

最近、活字離れがいわれ、特に学生が本を読まなくなったといわれる。私の学生時代にはまだそのような傾向はなく、様々な本を読んだ覚えがある。何を得たかといえば、第1に、自らと他人のことに関し、少なからず考える契機になったということ、第2に、文体の趣味のようなものができたことであり、印象深いフレーズは（コピーではなく）筆写をした。たとえば次のような。

「人間であるということは、立って歩くことなんだなあ。……立ち上がって、どれも自分とひとしい重みをもつ物たちの間で、生意気にも内と外を分けて、遠い近いを分けて、自分勝手な視野をつくって、大きな頭を細い首の上ののせてうつらうつらと歩きまわることなのだ。」

「人はその生涯を閉じるにあたってみずからこう尋ねるべきなのだ。お前は、いかなる人間関係の下に生き、いかなる人間関係を破壊し、いかなる人間関係を育てたか。」

第3に、本は本ゆえに貴からずということ。私

が通ったアメリカの大学図書館は、全面開架式であったから、学生は必要な本を書棚からとってきて読み終わると床に置いておく。それは、明確にもはや不要という意味であるので、夕方一度アルバイトの館員がそれを拾って書棚に返しにゆく。私が心理的抵抗を覚えたのは、本を床に置くという点であった。やはり本は大事という観念があるからだが、アメリカ人は大事なものはそこに含まれる思想や情報であって、本そのものではないということを実践していたのである。

## 科学雑誌がほしい

理学部教授 江沢 洋

ここ何年かの間に「教育」の概念がねじ曲げられてきていると思いませんか——勉強とは先生から話をきいて教わることなんだ、というふうに。たとえば、生涯教育だなんて事新しく言いますが、これは昔からあって、人びとは本や雑誌を読んで語り合うことで自らを教育しつづけてきたのです。「学生時代の読書について書け」と『来ぶらり』の編集部にいわれて考えたのはこのことです。

ほくが学生だった1951—55年は、東京地区でテレビ放送が始まり、「日本で原子力研究を行うための調査研究するために」といわれる中曽根予算3億円がついて議論百出、といった時代でした。そこで科学の動きとその社会的意味を教えてくださいましたのが科学雑誌『自然』(中央公論社、終戦の翌年に創刊)でした。専門的にすぎることなく、かといって舌足らずでなく、歯切れよく批判的に！

月刊雑誌ですから、やはり時の話題が多い。テレビの原理の解説は、すでに「商業主義に毒されなければよいが」と憂えています。歌舞伎座の緞帳に乱舞する蝶たちの羽根に回析格子を縫いつけたという報告は、同時に羽根のきらめきの秘密を語っています。生命はどこまで機械かの論議もさかん。わが国で初の理論物理国際会議には誌面が興奮し、若い学術会議の熱気もまた溢れ——。

この科学雑誌『自然』は1985年5月号に「向後2年間の休刊」を宣したまま、今も眠りつづけています。この話をしたらフランスの友人は言いました。「科学と社会や政治との関わりについて科学を職業とする者とそうでない者が討論する共通の広場が必要なんだ」。

## 乱読、精読—赤帯の思い出

経済学部教授 佐竹 義昌

「二度読む価値のない本は一度読む価値もない」という古諺がある。

しかし、考えてみると、一度読んでみないことには二度読む価値のある本かどうかはわからない。精読の準備段階としての乱読は、むしろ望ましい行動である。

このことを、独特のシニカルな口調で強調されたのは、旧制高校の恩師のS教授であった。教授に心酔傾倒していた私は、その教えにしたがって、大いに乱読の効果を発揮したつもりでいた。しかし、そうはいつでも戦前の1940年前後の旧制高校生では、読書の範囲は限られている。岩波文庫の赤帯を全部読んだというようなことが、文科系の旧制高校生の間で一種のステイタスシンボル(?)になっていた、何ともなつかしい時代であった。

先日、書店で久しぶりに岩波文庫の棚の前に立って、当時乱読精読した本を探してみた。友人たちと徹夜で人生論や恋愛論に夢中になった時、その動機や材料を提供してくれた本である。絶版ではないかと思っただが、よく見るとやはりある。ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』の8冊本は部厚い4冊本に変身しているが、ちゃんとある。エツケルマンの『ゲーテとの対話』は1冊本が全訳の3冊本になって並んでいる。眺めているとそれらの文字と、戦死した友人たちや、初恋の少女のおもかげが重なって、無性になつかしかった。乱読でも精読でもかまわない。青年期の読書には、ほかでは得られない貴重なものがあると思った。

この春、昭和61年度卒業生より図書館へ45万余円の寄金がありました。早速、以下の図書ほか計5点を備え付けましたので、ご利用下さい。 ▶マウンテン・ワールド(スイス山岳研究財団編 小学館) ▶アルルのファン・ゴッホ(ロナルド・ビックヴァンス著 みすず書房) ▶The Encyclopedia Americana 1986

## 書物の風景——(18)

このごろ、情報化時代のあふれた情報をうまく整理したなかなか便利で面白い雑誌群に出会う。「切り抜き誌」とか「切り抜き情報誌」とか呼ばれ、全国各地で発行されている新聞の記事を切り抜いて雑誌にしたもので、まさにスクラップブックの雑誌版だ。特にここ2、3年相次いで発行されているが、古いものでは、1967年発行の『新聞ダイジェスト』がある。政治・文化からスポーツまであらゆるテーマのもとに集められ、就職試験の参考書としても活用できる。

これに対して、最近ではテーマを絞って記事を集めたものが目立つ。出版・文化関係の記事を集めたものに『クリッパー』と『月刊活字から』がある。前者は1984年11月創刊、月2回発行、記事を日付順に並べ、巻頭の目次はNo.53よりテーマ別。出版広告を

### 雑誌、このごろ —切り抜き誌の時代!?



も対象としている点はユニークだ。一方、後者は今年2月に創刊したばかりで内容は前者とほぼ同じだが、「出版界は」「本の人は」など記事を20項目別に並べ、さらに特集を組み、雑誌という色彩を濃くしている。

ほかに『月刊子ども』、『切抜き速報教育版』、

『月刊文化財発掘出土情報』、

『月刊切抜き子どものからだ

と心』、『同保健』、『同体育・

スポーツ』、『月刊コンピュー

タダイジェスト』などがある。

どれも10数紙の膨大な記事

の中から10分の1ほどを選択

し、2ヶ月遅れくらいのスピー

ードで掲載していく。不断何

気なく読んで読み捨てられて

いく新聞記事が、切り抜き誌という形で数紙の記事と並ぶと、別の側面を現し、思わぬ発見がある。生きた百科事典、時代を読む新しい読み物とも呼ぼうか。(『 』は図書館または研究室備付) (雑誌係 工藤晶子)



### 三井文庫 別館

三井文庫は、西武新宿線新井薬師駅から徒歩で5分程の閑静な住宅街の中にある。そのせいもあって一般には知らない人もあるかも知れないが、本館は三井家300年にわたる膨大な資料を集めた我が国屈指の企業資料館として日本近世、近・現代史の専攻者にはなじみ深いところであろう。

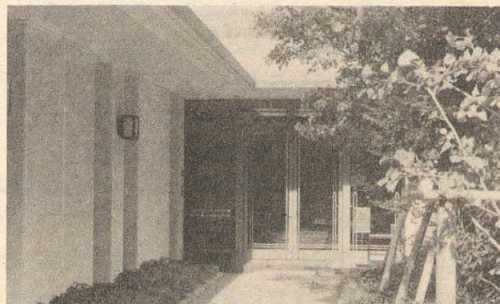
別館は三井家に伝わる美術工芸品の寄贈を受けて、昭和60年5月開館。陳列室の1つしかないこぢんまりした美術館であるが、収蔵室には円山応挙の「雪松図」をはじめとする国宝、重文級の美術品がずらりと並び、三井家の威勢をしるばせる。

室内は正倉院の校倉づくりを模したという特殊な構造によって湿度を常時一定に保つなど、収蔵品の保管には細心の注意が払われている。ほかに内外の貴重な切手のコレクションがあり、マニアには見逃せないところ。

なお別館開館3周年記念として、11月23日まで館蔵名品展が開かれている。

[中野区上高田5-16-1 ☎03(387)2211 開館時間: 10:00~16:30 休館日: 月曜 入館料: 500円] (史学専攻博士前期課程 1年 岡田泰介)

住宅街の中の閑静なたたずまい



## 参考室あれこれ

東京大学明治新聞雑誌文庫の『図書・資料類目録』を調べていたら、「**倫敦塔** ウィリヤム・ハリソン・エインスウォルフ 三木愛花(愛花仙史) 意訳 東京 共隆社 明治22.2(1889)」が目にとまった。昨秋、「卒論でさがしているのですが、**ロンドン塔**に関する文献はあまりないですね」と話していたYさんの顔が浮かんできた。その時は、国立国会図書館から、同書の石田幸太郎訳 東京 旺文社 昭和42(1967)を借りてあげた。あれから1年がたったわけで、この2冊を比較したら、また違った卒論になったかしらと、なつかしく思い出した。

「明治期の葬儀について、特に火葬について知りたい」と質問者。葬儀の手順に関すること

かしらと『冠婚葬祭事典』が浮かんでくる。こちらの表情を察してか、「実は漱石の『彼岸過迄』を読んでいます。火葬場の描写がでてきますが、この時代の火葬について生活習慣としてどうだったのか知りたいのです」の意を重ねて発言。参考係の未熟さゆえ、短時間でここまで会話がすすむのはめずらしいことと、張り切って調査開始。明治期という時代背景をとらえて、『明治世相編年辞典』『明治ニュース事典』『日本を知る事典』『新聞集成明治編年史』の火葬の項を丁寧にみていく。『彼岸過迄』の作品の中でとても重要な部分をしめていますと、かなりの時間をかけて調べあげていった質問者の顔が、「ありがとうございます」の言葉と共に、今も残っている。

(参考係 甲斐静子)

## Utlas Anymore?

『来ぶらり』17号にUtlasへの参加とその概略が紹介されていましたが、9月より、無事その本格稼働(オンラインによる目録作成)を始めました。それに至る前段階として、6月中旬に試験稼働(テスト入力)というUtlas導入への通過儀礼を経なければなりません。これは、2週間に及ぶその時のお話の一部です。

端末は計算機センターに設置。道中は長い。それで自然に、旅は道連れ世は情け。常時2~3人で繰り出す。実習室を横目に地階へ。ちよつとオフィス感覚で画面に向かう。最初の表示。Access key. 1/83 おつとキーのミスタッチ。1/83-20910. Enter hitlists commands: O.K. {+1 ノイズ/ えっ? 再度+1. Anymore? 編集コマンドだ。repl 600,c...sai//CHO SAI。なぜ? 表示はInvalid data。途端に、違う! やり直し! 右から左、左から右へ同僚達の声。サラウンド再生だ。指の震え、汗、混乱。料金は接続時間に比例する……するとアドバイス。地獄で仏。トライ。成功。しかし、すぐトロントは呼びかけてくる—Anymore? Anymore?と。

このように苦勞話は進行した。他方、試験稼働は、情報はタダではないという常識を、改めて我々に投げかけたのではないが。もしも、これが今回のこぼれ話と言えるなら……。 (洋書係 鈴木宗一)

## お知らせ

### ○大学祭の期間中は閉館します

10月30日(金)から11月4日(水)まで、ロビーと第1閲覧室が展示会場となりますので、閉館します。

### ○第4回「来ぶらりセミナー」

やさしい本の仕立て方

日時: 11月21日(土) 午後1時30分~3時30分

会場: 大学図書館3階会議室

定員: 20名(先着)

会費: 300円(表紙そのほか材料費)

申込みは11月9日(月)より、2階カウンターで受け付けます。ふるって御参加下さい。

講師の妙技は、一見の価値があります。

来ぶらり No.19 1987年10月1日発行

発行責任者: 森永毅彦 編集委員: 北村 誠 中野里美

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221